

きみの家まで、2km。

KIKI FILM digital books

本章

中2の夏、僕は大分に住む中学生、田舎の町をぶらぶらする日々彼女なし。友達と居る方がいいから彼女は要らなかった、この時はね

中2の終わり、女の子に興味なかった僕だったが、一人の女の子から告白された女の子の名前は詩穂(しほ)僕は何気なく「OK」した。別にすぐ別れるだろうし、高校も違うし遊び程度に付き合った。付き合って初めてのデート 初めてのデートだったから照れながらの会話。最初はすぐ別れると思ってたけど、自分が詩穂に入り込むのがわかった 日々を重ねるほど好きになって行ったのが自分でもわかった。

クリスマスも一緒に過ごしたし、お正月も一緒に初詣行ったし、ずーと一緒にだった。

中3の夏 お祭りの日、町は活気にあふれていた。その日は彼女と行かずに友達と行った。その日のお祭りが終わったあとみんなで花火をしたり楽しかった。10時に帰宅した僕は、なにげなく携帯の画面をのぞいた。メール1件受信 という文字 件名 Re: 本文「ごめん。祭りで知らない人にメアド教えてって言われて、教えてしまった」返信『え?どういうこと?』返信「ヤンキーから絡まれてアドレス交換しよって言われた、最初はずーと断ってたよ。ちゃんと彼氏居ますって言ったし、詩穂には信二が居るから。」返信『教えてらダメやろ。メアド変更してくれん?俺が居るって思うならメアド教えないでよ』返信「ごめん。嫌いになったら振っていいよ」今の僕からしたらこんなことちっぽけな話だった。その時は、ヤンキーに取られるとか思って、弱い自分に腹が立って、絶対強くなりたいてって思った。もうこんな思いしたくないってね。こんなこと思って過ごす日々、そんな中ある日僕は・・・。

教師に殴られた

首を閉められ、机にたたきつけられ、いすの上になげられ、涙が出そうだった。

僕は弱いから 大人達は言う「手を出した方が負けだ」 そんな大人が手を出すから説得力がないんだ。

もう大人なんか信じない、信じてない信じようって思わない。

そんなことあった次の日から僕は不登校になった、それからは先輩とよく遊ぶようになった。

毎日のように先輩のバイクの後ろにまたがり、あちっこっちに行った、飲みに出たり、毎晩のように楽しかったし、強くなれた気がした。親は毎日僕に怒った、怒鳴った僕は現実から逃げたくて走って2km先にある彼女の家まで行った、そんな俺の一番近くに居てくれたのは彼女だった。

「信二がしたいようにしたらいいよ!」「信二にいつでも勉強教えられるように詩穂がちゃんと勉強しとくからね!」そんな言葉を聞いたら目が覚めた。俺が求めてた強さってこんなんじゃないって、それからは毎日彼女の家で勉強したけどそんな人生うまくいかない。

「やめて」 『今更無理だろ、いいから黙れ』 「ほんとにやめて」

詩穂は姉の彼氏(一樹)とSEXをした。その次の日僕は詩穂と遊んだ、DVDを見ることになりDVDを借りてみた。2人はいい感じになり、SEXをした。詩穂は急に泣いた。「どうしたの?」詩穂は「なんもない。ごめん」ってつぶやく

その日の朝は僕はバンド練習があった、練習がある前に僕は詩穂が見たいって言ってたドラマをDVDにダビングして渡しに言った、「これを見て待ってて」って言い。詩穂の部屋の前には、靴があった、窓の鍵は開いていた。僕は詩穂の姉の彼氏の靴に似て たから別にそんなに気にせず、窓をあけてDVDを置いて帰った。

「なにがあったの?説明してなあ詩穂」 『信二ごめん。』 「謝らなくていいから」 『言えない』 「もしかして・・・?」 『うん・・・』 「朝、詩穂の窓の前にあった靴って一樹君の?」 『うん』 「一樹君となにかあったの?」

やられた

「え?なんで?」 『信じて聞いて、嘘なんかないから、詩穂めっちゃめっちゃ嫌だった』

夜寝てたら一樹君が来て、いつもだったら「お姉ちゃん起こしてきてくれない?」って言うから別に疑わず、窓をあけた、けどその日は変だった。「詩穂ちゃん待って。ちゅーして」詩穂めっちゃめっちゃ怖かった。そしたら部屋に入ってきて、やられた。

僕は信じたくなかった。

その日は詩穂から「ごめん」「別れたくない」「大好きだから」たくさんメールがくる 詩穂が一番辛いはずなのに……。僕も辛かった、涙が出てきた

次の日詩穂が心配だった僕は久々に学校に行った、靴箱には詩穂の靴はなかった。僕は走った。詩穂の家まで。2kmの道のりは長く感じた、いろいろな思いが出てきた。詩穂の窓を強くたたき、カーテンの隙間から詩穂は顔をのぞかせる

僕は辛かったけど、笑顔で居た。

その日の夜僕は一樹君にメールすることにした。「すいませんが、どういう状況で詩穂とやったんですか？」1日経っても返事はこなかった。3日後返事が来た「電話番号教えてくれないかい？」僕は手が震えていた。「080-xxx-xxx」15分後電話がかかってきた。

僕はつぶやくように「もしもし」と言った。

『ほんにごめん』

「いや。どういう状況やったんすか？」

『俺すごく酔ってって』

「あ……。」

『ほんとすまない』

「いや、大丈夫です」

もう大丈夫ですって言うしかなかった気がした。

『大丈夫じゃないけん』

「いや!あとは気持ちの問題なんで」

『考えが大人やな』

「いや、大人じゃないっすよ」

『今度飯つれて行ってあげるわ!』

遠慮しますって言いたかったけど言えない

「あはは、よろしくお願ひします」

『ならまた電話するね!』

「失礼します」

プツ

色んな思いがあったけど、こらえたもうこの話は終わろうって思った詩穂のことはまだ信じれないけど・・・

今年のクリスマスも2人で過ごした。詩穂がチーズケーキ作ってくれて2人で食べた あれから4ヶ月未だにあの辛さは思い出す。詩穂も思い出すだろう。

12月25日 僕は詩穂を信じるって決めた。男だったら一度信じるって決めたら最後まで信じろ

1月3日 信じると言って9日 僕は信じれてなかった。いつも疑ってばかりで。詩穂も信じてもらえないことに疲れていた。

「もうしらない」

『じゃあいいよ。別れよ』

「そうしよ」

あっけなく終わった恋。

別れて2週間 諦められなかった僕は詩穂ともう一度話すことにした メール

「詩穂、やっぱり好きなんだ、付き合ってくれないかな？」

『ごめん。今は無理』

このやり取りを繰り返す毎日

1月17日 詩穂は入試だった、みんな3時に帰るということで、僕は詩穂の家に行った。

詩穂に電話、メールしたけど返事はこなかった、

「今詩穂の家の前にいるんやけど、部屋に来てくれん？」

「詩穂受験おつかれさま!今 から会えない？」

詩穂に買った、ネクツレスを持ってずーと待った。

雨が降り出して、雨が雪になっても待った、待つ事2時間。

詩穂から電話が来た

「もしもし?信二?」

『うん。外にいるんだよね』

詩穂は部屋に来た、

「ごめん。」

『今帰ったの?』

「いや。結構前に帰ったけど、携帯見てなかった」

僕はせっかく会えたのに、悲しくなった。

『詩穂、好きなんだ、付き合ってくれないかな』

「・・・。」

『これ詩穂に買ったネックレス、受験お疲れ様』

「ありがとう。けど今は無理なんだ。」

『そうだよ、帰るね』

2時間も待った僕は詩穂と会って2分もしないうちに帰った。寒かった。もう諦めたかった。

諦められたらどんだけ楽なんだろう。

人のこと愛するのがこれだけ辛いつて知らなかったよ

詩穂

それから僕も僕がしつこく、好きって伝えた。

これが最後って思った告白

「こんなに好きになったのは初めてなんだ、こんなに追いかけたのも初めて、好きなんだ。付き合ってくれないかな？」

詩穂は軽くうなずいて『わかった、よろしくね』

それからは僕が追いかける一方

別によかったんだ

大切にするよ

中学を卒業して2人は別々の高校に行った

もう不安とかなかった、だってあんなことあったからね

高校3年間いっぱい喧嘩した、別れ話も出た

けど、追いかけるって決めたから。

高校卒業して仕事について

給料安定したら

結婚しような

愛してるよ詩穂